

## [資料]神奈川県平塚市での関東大震災の跡—慰霊碑巡礼の記録

鹿島小堀研究室\* 武村雅之

ひらつか防災まちづくりの会\*\* 篠原憲一

Report on the Pilgrimage for the Memorial Towers from the 1923 Great Kanto Earthquake  
at Hiratsuka City in Central Kanagawa Prefecture, Japan.

Masayuki TAKEMURA,  
Kobori Research Complex, Kajima Corp., Minato-ku, Tokyo, 107-8502, Japan  
Ken'ich SHINOHARA  
Hiratsuka-Bousai-Machidukuri-no-Kai, Hiratsuka-shi, Kanagawa, 254-0045, Japan

Many memorial towers and monuments have been contracted for the heavy toll of life and for the reconstruction of some damage structures or cities in Southern Kanto district. Death claimed a toll of about 105000 totally from the 1923 Great Kanto earthquake. These towers and monuments must be forever spokesmen for the victim's dying wish "don't repeat such damages". However, most of them have been already forgotten by the citizens. We thought not only that it's sacrilege but also that they are useful for the public education of earthquake disaster prevention. This manuscript is a report on the search and the pilgrimage for them at Hiratsuka City in Central Kanagawa Prefecture.

Keywords: Memorial tower, Great Kanto Earthquake, Hiratsuka City

### § 1. はじめに

関東大震災の慰霊碑や記念物は、石を材料として  
いるものが多く、その後の戦災もくぐり抜けて、現在も  
多くが健在である。ところが、震災後 80 年以上が経  
過し周りの住民でさえ、例えその前を毎日歩いてい  
ても存在に気づかないケースも多いようである。震災  
対策のためにあの手この手の活動をすることも重要  
だが、まず原点に立ち戻って、慰霊碑や記念物の前  
で、関東大震災の被災者の思いを肌で感じることも  
必要ではないかと考えた。本資料はそんな気持ちか  
ら神奈川県平塚市内を調査し、2009 年 5 月 30 日  
の午後、「ひらつか防災まちづくりの会」のメンバー 6  
人で市内にある慰霊碑や記念物を巡礼した記録の報  
告である。

### § 2. 当時の平塚町と被害

現在の平塚市は、1923(大正 12)年の関東大震災  
の当時、平塚町以下 12 町村よりなっていた。江戸時  
代は伝馬宿駅として栄えた平塚は、明治中期からは  
海岸部を中心に住宅地、別荘地として注目されるよ  
うになり、さらに平塚町、大野町、須馬村は第一次世  
界大戦の過程で工業化への動きが活発になっていっ  
た。その象徴が 1916(大正 5)年に設立された相模紡  
績工場と 1907(明治 40)年に設立された日本火薬製  
造会社を 1919(大正 8)年に買収した平塚海軍火薬  
廠である。海軍火薬廠は JR 平塚駅の北側で現在の  
横浜ゴムと総合公園の広大な敷地を占めていた。

平塚町の震災の様子を、本稿と関連する箇所を中  
心に西坂(1926)から引用すると以下ようになる。西

\* 〒107-8502 東京都港区赤坂 6-5-30

\*\* 〒254-0045 神奈川県平塚市見附町 5-7-804

電子メール: takemurm@kajima.com

坂勝人は当時神奈川県警察部高等課長であった。

平塚地方は砂地平面地で地盤鞏固(きょうこ)でない為被害も大きく、平塚駅附近から東海道国道筋に面した民家は大部分倒潰又は半潰し、中にも酸臭を極めたのは、平塚駅の建物が全潰し、駅員と列車待合客と百数十名下敷きになり、死者六名、負傷若干

名を出したのや同町相模紡績株式会社は、工場、寄宿舍、舎宅、食堂、倉庫等併せて四十三棟中、七棟半潰し、他は全部全潰し、殊に周囲の高い煉瓦塀が一時に崩壊し、工場内の百五十二名、舎宅其の他十三名計百六十五名の死者と、重傷者二十一名、軽傷者若干名とを出し、平塚小学校も倒潰したが、同年八月三日から同町に全国殖産工業博覧会開催

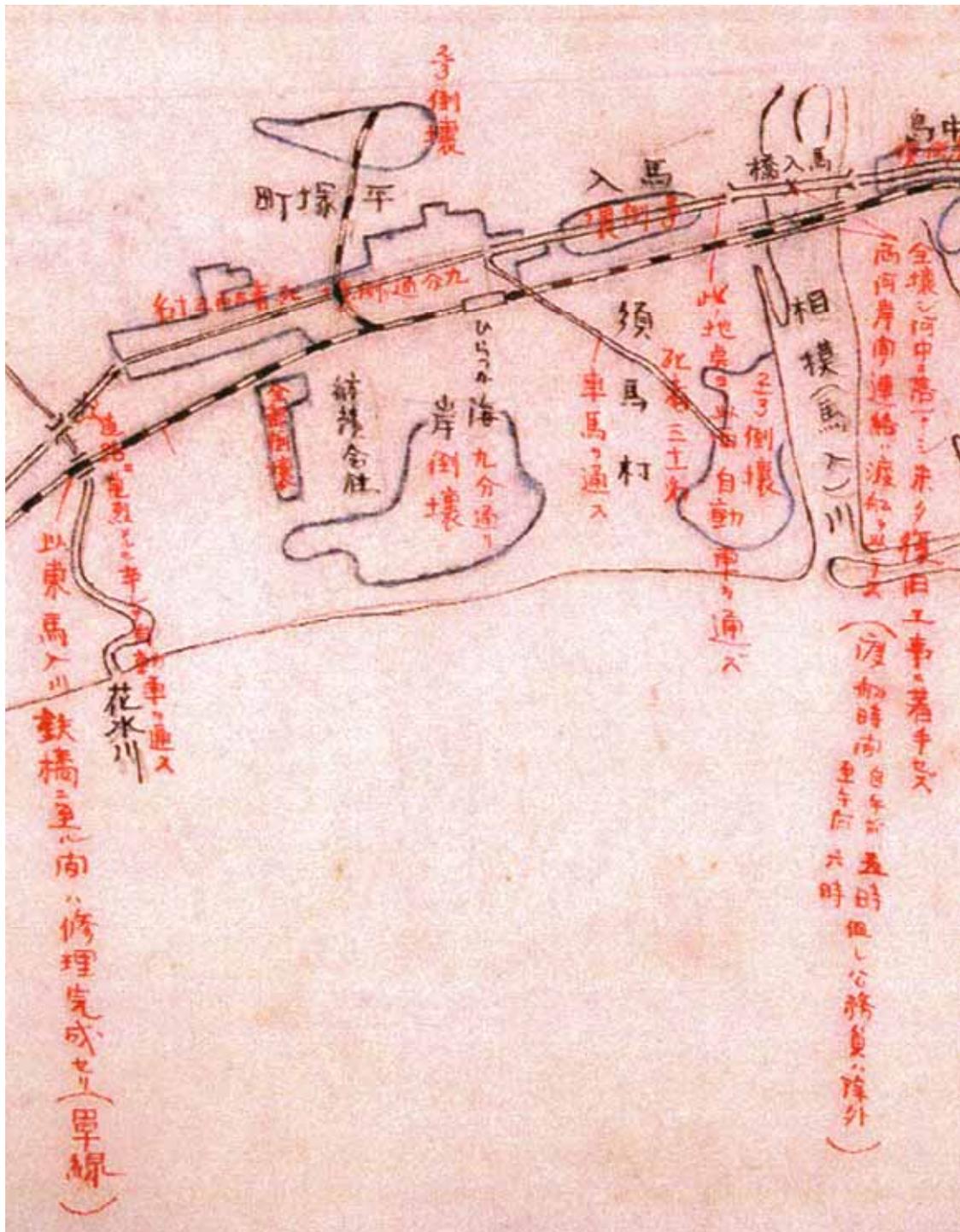


図1 参謀本部陸地測量部による震災地応急測図原図の平塚付近[国土地理院所蔵]

Fig.1 Urgent survey map for Hiratsuka City by the Land Survey Department of Japan General Army Office.

され、震災当日午後一時から同小学校に褒賞授与式を举行される筈で、約二百名参集して居た折に校舎が全潰した為、教員、生徒、参列者で計二十一名の圧死者を出した。須馬村須賀(すばむらすか)も被害多く、小字仲町と称する人家稠密地の家屋は約六分通り倒潰又は半潰し、……

震災直後部内(大磯警察署管内)七ヶ所から火災を起こしたが、其の内災害の大きかったのは、平塚町に在る海軍火薬廠の焼失で、同廠では震動の為研究部試験室内の瓦斯管破列して原料に引火し、大音響を発して爆発し、黒煙四辺を蔽ひ火柱天に沖し、凄絶の光景裡の構内建物二十二棟を焼失したが、同廠の構内頗る廣く、一般民家と遠かったので延焼せず、又、人畜に被害がなかった。……

橋梁の墜落、道路の亀裂、山崖及堤防の崩潰を挙げれば、馬入川の三百六十五間の鉄道鉄橋及人道木橋馬入橋は、共に橋脚から覆って墜落した外、東海道国道筋の大小橋梁は、悉く墜落又は大破損害を為し、交通に堪ゆるものは一つもなく、河川堤防の決潰箇所も多かったが馬入川と花水川は最も甚しく……

海嘯は部内海岸一帯に亘り、震後間もなく約一丈の高度で来襲したが別段の被害を見なかったが、それは同海岸が地震と共に一帯に隆起した為で、九月九日中村理学博士が同地視察の際、大磯警察署で言明した所に拠ると同地方海岸は一帯に十一・二尺の隆起を見たが、今後余震に依り幾分の低下を来さんとのことであったが、同月二十日、同博士再度調査の結果、最初のときより低下したが、尚四、五尺の隆起だとのことであった。

ここで、中村理学博士とは、震災当時中央气象台地震掛であった中村左衛門太郎であろう。平塚市の被害については『平塚市史』第7巻資料編[平塚市博物館(1997)]にも、体験談や復興記事の他に関連記事があるが、地震直後の大阪や長野の新聞記事が主であり被害数などの信憑性に乏しい。また本編の近現代編は未だ刊行されていない。

図1に平塚地域の震災地応急測図原図を示す。井上公夫(2008)によれば、震災地応急測図原図は、参謀本部陸地測量部(現在の国土地

理院)が、震災直後の9月6日から15日までの約10日間にのべ94人を動員して、震災の救援作業や警備の便に供すために、震災に伴う地形地物ならびに交通網の変化状況を調査して地図に記したものである。図1は5万分の1の地形図の写図上に、調査した被害が記録されている。平塚地域は、先に述べたように軍関係の施設があったためにいわゆる秘図地域に指定され、地図の持ち歩きが規制されていた。

図1を見ると、平塚駅の北側を東西に走る国道1号線沿いの民家は「九分通倒壊」とあり、また須馬村で「2/3倒壊」と書かれたあたりが、須馬村須賀にあたる。被害程度は、いずれも上記引用の内容とほぼ一致するようである。国道1号線沿いに特に民家の被害が大きいのは、南側に砂丘間の低湿地が国道に沿って東西に伸びているためではないかと思われる[井出栄二(1985)]。

また、図1には軍事施設のせいであろう海軍火薬廠は示されていない。その他の地域については、以下それぞれの巡礼地点毎に必要なに応じて関連を説明する。なお諸井・武村(2004)によれば、関東大震災による現在の平塚市域の死者数は、平塚町266、須馬村38、大野村22、旭村16、土澤村19、金目村12、金田村7、豊田村6、神田村30、城島村6、岡崎村16、大根村52の計490名にのぼった。平塚町の死亡率は2.3%で、県内の人口1万人以上の町では横浜市6.6%、保土ヶ谷町3.3%、鎌倉町2.8%に次いで多く、紡績工場での犠牲が原因の一つである。

### §3. 慰霊碑など巡礼地点

今回、訪れた慰霊碑や記念物など関東大震災ゆか



図2 平塚市内の関東大震災関連の慰霊碑や記念物の所在。  
Fig.2 Map of memorial towers and monuments in Hiratsuka City

りの地点を現在の地図上に示したのが図 2 である。図に示す以下の7ヶ所を順次まわった。

- ① 日本たばこ産業(JT)平塚工場(旧相模紡績工場)内, 慰霊碑
- ② 阿弥陀寺境内, 供養塔
- ③ 大鳥公園(大鷲神社横), 慰霊碑
- ④ 国道一号線馬入川橋梁脇, 陸軍架橋記念碑
- ⑤ 三嶋神社境内, 諸事
- ⑥ 長楽寺境内, 供養塔
- ⑦ 善性寺墓地区内, 慰霊碑

### (1) 日本たばこ産業(JT)平塚工場内, 慰霊碑

構内に図3に示すような高さ約1mの慰霊碑がある。碑文は以下の通りである。

正面 関東大震災殉難慰霊塔  
裏面 昭和六十一年九月吉日建立

現在の工場の敷地は西坂(1926)の引用中にある相模紡績株式会社の工場に対応する。図1で「紡績会社, 全部倒壊」と書かれたところがそれに当たる。今泉(2002)によれば, 相模紡績は1916(大正5)年に設立された会社で, 震災当時従業員約3000人を擁していたが, 煉瓦建の工場であったため, 倉庫の一部を残して大半の建物が全壊して死者144名, 重傷者25名を出した。一般に当時の紡績工場は昼夜二交替制がとられ, 144名のうち, 60名は寄宿舎で睡眠中に家屋倒壊のため圧死, 他は工場より脱出中に煉瓦壁倒潰により圧死した。西坂(1926)と死者数, 負傷者数は多少異なるが総じて大きな被害を出したこと



図3 日本たばこ産業(JT)工場構内の慰霊碑(2009年5月)。

Fig.3 The memorial tower of Japan Tobacco Inc.

に変わりはない。なお内務省社会局(1926)の『大正震災志』上巻に死者数144名, 重傷者25名とあり, 今泉(2002)はその数を引用したものと推察される。さらに今泉(2002)によれば, 社長の日比谷長次郎は平塚駅舎の全潰に巻き込まれて死亡した。平塚駅舎の被害は西坂(1926)の引用中にも書かれている。文献によって潰と壊がそれぞれに使われているが, 意味に差があるかどうか分からないので, ここでは文献通りそのままを用いた。

震災後, 相模紡績株式会社は1935(昭和10)年に富士瓦斯紡績株式会社に合併され, 戦時中多くの紡績工場が軍需工場となるなかで, 平塚工場は1937(昭和12)年から大蔵省専売局によるたばこ工場となった。工場はその後1945(昭和20)年の平塚空襲で被災した。戦後は, 1949(昭和24)年に大蔵省専売局が日本専売公社として独立, さらに1985(昭和60)年に日本たばこ産業株式会社(JT)となって民営化された。JT平塚工場によれば, この工場は当初より原料加工工場として現在に至っている。また慰霊碑が建てられたのは1986(昭和61)年で, 民営化直後の工場立替に伴い安全祈願を目的にしたものである。それ以来毎年9月1日には工場の幹部が集まり, 後で紹介する阿弥陀寺の住職を招いて慰霊祭が挙行されてきたという。

### (2) 阿弥陀寺境内, 供養塔

阿弥陀寺は図2に示すように, JT平塚工場に対して, JR東海道線の線路を挟んで反対側にある。図4に境内にある慰霊碑を示す。中央の碑がそれで, 高さは約1.5m程。碑文は以下の通りである。

正面 平塚町大震災殉難者霊位供養塔 伴誉大念代  
裏面 昭和四年建立

台座に勸進者32名の名前が刻まれているが, 全て女性である。後で述べるように近くに平塚遊郭があったこともあり, 斉藤(2006)は, 寺誌編纂用にまとめられた資料(『寺誌稿』)で, 供養塔は, 震災で殉難した多くの人々, 特に特殊の環境にあった女性のために, 7回忌の追善供養に建立されたものであると記されている。伴誉大念は建立当時の住職である。『寺誌稿』には第31世浄誉匡念代と記されており, 現住職の斉藤匡念氏の編集になる資料である。

また, 向かって左隣には, 「天災 地変横難横死及

至有無兩縁之諸霊，當堂宇建立時地中隠没發遺石塔之諸霊」という碑文のある細長い五輪塔が立っている(図 4)が、住職によれば、これは背後にある本堂を1968(昭和 43)年に建てた際に、敷地にあった石塔その他のものをまとめて供養し埋設したが、完成後の1984(昭和 59)年にさらに諸精霊を慰めるために建立したもので、関東大震災とは直接関係ないということであった。

『寺誌稿』では、『新編相模風土記』(天保年間に江戸幕府により編纂)を底本として、平塚地域記事の抄録をした『平塚市風土記抄』(昭和 33 年刊)と『平塚繁昌記』(明治 29 年刊、島本佐郎編集)をもとにして寺の由緒がまとめられている。その一部は1968(昭和 43)年の本堂の新築工事に合わせて、本堂正面一階の石壁に埋め込まれた石碑に刻まれた「本堂建立由縁」にも見ることができる。要点をまとめると以下のようになる。

阿弥陀寺は、鎌倉時代、1227(安貞元)年に親鸞上人の弟子である了源によって建立されたが、室町

時代の文明年中(1469-87 年)に無住となり、その後1555(弘治元)年に浄土宗に改めて、平塚庄の住人、府川出雲守源吉種の開基、さらには建蓮社超誉雲公上人により開山し今日に至っている。その間に、1703(元禄 16)年の元禄地震で倒壊[1725(享保 10)年再建]、1758(宝暦 8)年に失火[1776(安永 5)年再建]、1893(明治 26)年に類焼というように、関東大震災までに何度か災害に見舞われた記録がある。

さらに「本堂建立由縁」によれば、1923(大正 12)年 9 月 1 日の関東大震災で倒潰、昭和 20 年 7 月 16 日の大空襲で全堂宇焼失と記されている。

### (3) 大鳥公園(大鷲神社横)、慰霊碑

大鳥公園は、阿弥陀寺から北東に約 500m離れた所にある。その南西の隅に大鷲神社(おおとりじんじや)があり、神社の社の隣の猫の額ほどの敷地に高さ約 1.5m の慰霊碑がある(図 5)。碑文は以下の通りである。



図 4 阿弥陀寺境内にある供養塔(2009 年 5 月)。

Fig.4 The memorial tower of Amida-ji temple.

正面 震災遭難者之霊

裏面 為大正十二年九月一日遭難者追善供養建立  
昭和四年九月一日 平塚貸座敷組合員一同

大鳥公園のある平塚町2丁目には1953(昭和28)年頃まで遊郭があり、道路を挟んで大鳥公園の向かい側一体の旅館街がその面影をとどめていたが、今はそれらもほとんどない。大鷲神社は江戸吉原の大鷲神社と同型の花柳街近親の神社である[今泉(2002)]。裏面にある貸座敷組合とは娼楼の組合であろう。

この慰霊碑の写真は、1972(昭和47)年発行の平塚市役所(1972)の『平塚市制40周年記念誌』という写真集の中にもあるが、まわりの風景が今日の場所と異なる上に、台座の背丈が2倍以上高い。さらに写真には「旧平塚遊郭内」という説明が付いている。現在の慰霊碑は、おそらく隣接する旧遊郭内にあったものを後年今の場所に移したものであろう。

横に立つ説明板は、その際またはその後建てられたものであろうか。説明板の表題には「震災遭難者供養碑」とあり、最後に平塚観光協会と記されているが、説明の内容では慰霊碑建立のいきさつなどには一切触れず、西坂(1926)の引用と同じくもっぱら平塚町全体の被害を記している。その最後で平塚第一小学校(現在の崇善小学校)でたまたま行われていた全国殖産博覧会での被害のことにも触れている。

平塚第一小学校の旧校地を図2に示す。現在の市民センター前、公民館の横にあたり、樟樹(くすのき)の古木と、これも平塚観光協会による「平塚小学



図5 大鳥公園横の慰霊碑(2009年5月)。右横は大鷲神社のお社。

Fig.5 The memorial tower in Otori park.

校蹟の樟樹」という説明板があり、80年前に旧校庭に蒔かれた樟樹の種が大きくなったと記されている。

#### (4) 国道一号線馬入川橋梁脇、陸軍架橋記念碑

次は墜落した国道一号線の馬入橋の復旧に関する記念碑である。記念碑の高さは約1.5mで、相模川に架かる馬入橋橋梁の平塚側のもとにある(図2)。図6がその様子である。碑文は正面のみに書かれ、以下のように記されている。

正面 陸軍架橋記念碑

大正十二年九月大震ノ際京都工兵第十六  
大隊ハ馬入橋架設ノ為メ同月十七日起工  
汗血ノ勞ヲ費ヤスコト一旬餘十月三日竣工  
橋の長さ四百五十米突中三百米突

大正十二年十月 工兵第十六大隊長  
(裏面記載無し)

記念碑の脇には平塚市による説明板がある。その内容と今泉(2000)をあわせて状況を説明すると、震災復旧には交通網再建整備が急務であり、先ず馬入橋の復旧に着手した。最初は、馬入の消防組員と在郷軍人が応急措置として仮橋を二つ造ったが、9月16日の豪雨で流失した。図1の震災地応急測図原図をみると、調査工程の9月6日から15日のいつかの時点での馬入橋の状況について「全壊シ河中ニ落下シ未ダ復旧工事ニ着手セズ 両河岸間ノ連絡は渡船ヲ以テス」とある。渡船時間は午前5時から午後6時であり、「但シ公務員ハ除外」と付け加えられてい



図6 馬入橋西詰にある陸軍架橋祈念碑(2009年5月)。  
Fig.6 The monument for the reconstruction of Banyu bridge.

る。

このような中で、十七日に豊橋の第十五師団工兵第十五大隊と京都の第十六師団工兵第十六大隊が来て仮橋工事に着手した。京都の第十六大隊は平塚側から、豊橋の第十五大隊は茅ヶ崎側から工事を行い、十月三日に完成した。今泉(2000)によれば、記念碑は挺身的な工兵隊員の活躍に対し地元有志が建碑したとあるが、土井(1996)には工事の完成を記念して工兵隊自身が建立したとある。碑文からは後者のようでもあるが、真偽のほどはわからない。今泉(2000)によれば、工兵大隊はそのあとすぐに酒匂川仮橋架設に向かったという。

### (5) 三嶋神社境内、諸事

三嶋神社には他の場所と異なり特別の慰霊碑が在るわけではないが、「復興寄付 金壱千圓也 昭和二年一月須賀漁業組合」と書かれた石塔や二の鳥居の社殿側から見て向かって右側の柱に「大正十五丙寅歳八月再建」、左側には「明治十八丁酉歳五月修膳」(丙:ひのえ、丁:ひのと)とある。右側は関東大震災の被害を受けての再建の記録と考えられる。また神社の話では、関東大震災では本殿に大きな被害は無かったが、1945(昭和 20)年の平塚空襲で焼け、現在の本殿は戦後再建されたものである。写真(図7)は二の鳥居と本殿である。二の鳥居と一の鳥居との間には弁天社が今でもあるが、高瀬(1970)によれば、これを中心に三十年ほど前まで(昭和 20 年ころまでか)池が2つあったと書かれている。神社の話では、震災後池に水が流れ込みにくくなり、水質も悪くなって結局埋め立てたとのことであった。都市化など



図7 三嶋神社の境内(2009年5月)。正面奥が本殿、手前が二の鳥居。

Fig.7 The precinct of Mishima shrine.

他の要素も考えられるが、西坂(1926)の引用の最後にある地震による土地の隆起と何らかの関連があるかもしれない。

三嶋神社は須賀の鎮守、お明神さんと呼ばれ、寛文年間(1661-1673)に伊豆国の三嶋神社から勧請したといわれ、漁師まちの信仰を集めてきた[井出(1985)、平塚市博物館(1993)]。なお関東大震災当時は須馬村となっていたが、須馬村は 1890(明治 23)年に馬入村と須賀村が合併してできたものである。明治初年の神仏分離までは、後で述べる長楽寺持の神社で祭事万端同寺が行っていた。祭典は、今は 7月 19日であるが昔は隔年の 9月 29日であり、7日間にも渡って長く続き、「須賀の尻なしまつり」と言われた[高瀬(1970)]。写真の鳥居は大きな台座に乗っているが、神社の話では、祭典の際の大御輿を姿勢を低くして通していたが、平成になる頃に事故が起こり、そのために台座をかまして背を高くしたということで地震とは関係ない。

### (6) 長楽寺境内、供養塔

須賀寺町の一角にある長楽寺の境内には、図 8 にあるような高さ 3m にもおよぶ立派な供養塔がある。碑文は以下のとおりである。

正面 大震災歿死者供養塔

側面(向かって左)「須馬村 歿死者 俗名」として 75 人の名前を記載

側面(向かって右) 以下のような記述がある。

大正十二年九月一日関東大地震ア一府四縣未曾有ノ惨禍ヲ受ケ東京横濱横須賀小田原等皆焼ケ其他ノ各地被害甚大當村ハ家屋倒潰壓死者六十余名ヲ出ス此惨害ハ一朝ニシテ数十萬ノ生民ト数十億ノ財産トヲ奪ヒ去リ實ニ悲痛ノ極ニ達セリ茲ニ歿死者ノ三回忌ニ當リ供養塔ヲ建設シテ永遠ニ紀念シ回向スルモノナリ

大正十四年九月一日

發願者 長楽寺第二十五世 金剛乘精辨

台座両側面 建立寄進者名と寄付金額記載

(裏面に記載なし)

土井(1994)でもこの碑が紹介されている。右側面の碑文中の当村、つまり須馬村の圧死者 60 余名と左側面記載の歿死者の名前の数 75 名は一致しない。当時の記録はその後の空襲で焼けてしまい理由は確



図 8 長楽寺の供養塔(2009年5月)].

Fig.8 The memorial tower of Choraku-ji temple.

認できないが、須馬村の住民で村外で亡くなった人が 10 名余りいたのではないかと推察される。供養塔の建立は1925(大正14)年9月1日とあり、三回忌を記念したものである。

高瀬(1970)によれば、長楽寺はかつて真言宗の名利で、江戸時代初期は末寺十四を数える大寺院であったが、寛政年間(1789-1801)に炎上した。明治以降は関東地震で倒壊し、さらに1945(昭和20)年の平塚空襲で堂塔伽藍を全て失った。その都度再建を重ねたが、戦後は再建がならず、バラックの仮本堂で今日に至っている。2000年に本山の推薦によって住職に高橋智運氏を迎え、現在2012(平成24)年の再興を目指した活動が続けられている。

上記供養塔の写真は、大鳥公園の慰霊碑とおなじく、平塚市役所(1972)に掲載されているが、場所は仮本堂の隣で、しかも台座は今のようなコンクリート製ではなく、石積で高さも1m以上もある立派なものであった。時期は分からないがこの供養塔も境内で移転したことが分かる。

#### (7) 善性寺墓地内、慰霊碑

長楽寺周辺は、寺町と呼ばれていたように寺院が多く存在する。慰霊碑のある善性寺墓地は海宝寺に



図 9 善性寺墓地内にある慰霊碑(2009年5月).

Fig.9 The memorial tower of Zensho-ji temple.

隣接している。善性寺は日蓮宗の寺で、寺本体は三嶋神社の近くにあり、墓地とは多少離れている。図 9 に慰霊碑を示す。高さは 1m 程度の小振りなものである。

正面 大震災歿死者各霊位  
裏面 昭和四年八月  
丹精者主任 加納智珠

この碑は7回忌に建てられたものである。佐藤菊治(2002)によれば、善性寺は 1942(昭和 17)年に横須賀市から平塚市須賀に移転してきた寺で、その前には鬼子母神を祭るお堂があったという。ところが 1945(昭和 20)年の平塚空襲で全焼し、1964(昭和 39)年に再建されたということである。お寺の話でも、善性寺はもとは横須賀にあり、30 代以上も続いた寺であったが、廃寺模様であったために軍に接收され移転を余儀なくなされた。一方平塚にあったお堂も 20 代以上の歴史があり、それを護っていたのが加納智珠で、善性寺の移転後、そのまま第一世となった。上記の慰霊碑は、善性寺移転前に平塚の人々がお堂に立てたもので、しばらくは善性寺の境内にあったものを、その後墓地内へ移転させたということである。丹精者とは丹誠者とも書き、心をこめてことを行う人の意味で、慰霊碑建立の思いをもった人々のことであろう。その代表で主任が加納智珠ということだろう。

#### § 4. おわりに

ひらつか防災まちづくりの会は 2003 年に、平塚市内の NPO や自治会や PTA などによる活動を結集して自分たちのまちは自分たちで守ろうということを合い言葉に結成された市民団体である。筆者の一人である武村は、地震学の専門家としてその活動に協力してきた。

一言で防災活動と言っても範囲は広いが、何を置いても会員相互の親睦が重要と、時々近場の温泉に出かけて親睦を深めている。その際より充実した会合にしようと、武村が提案して道すがらにある関東大震災の慰霊碑や記念物の案内を始めたのがこの種の活動の始まりである。

武村が既存の資料[たとえば神奈川県立歴史博物館(2003)]をもとに、周辺情報も集めて隣の厚木市の慰霊碑を案内した際のこと、被害がずっと大きかった平塚市に慰霊碑が無いわけではないと立ち上がったのが、共著者の篠原である。本稿に示した慰霊碑や記

念物の手がかりを地元の利を活かして次々と見つけ、日本たばこ産業との交渉などをして今回の調査の準備を整えた。

慰霊碑巡礼を終えて感じるのは、犠牲者への慰霊の気持ちと将来にむけた災害軽減への思いを強くすることができたことである。またそれだけに留まらず、地元のメンバーは、慰霊碑や記念物にまつわる事実を知ること、平塚の生の歴史に触れることができ、町への思いをあらためて深めることができたようである。また専門家として武村は、防災活動の新たな手がかりを得たように思う。いずれにしても予想外の充実感を得ることができたというのが参加者一同の感想であった。このような活動が他の地域にも広がれば、地震防災への取り組みを新たに後押しできるのではないかと思う。

なお巡礼の過程で、日本たばこ産業の社員の方々や、阿弥陀寺、三嶋神社、長楽寺、善性寺の住職ならびに奥様など関係の方々から慰霊碑や記念物にまつわるお話を聞かせていただいた。特に JT 平塚工場では業務サービス担当次長の細川真喜男氏等に、日曜日にもかかわらず工場内を案内していただいた。また阿弥陀寺住職の斉藤匡念氏からは、『寺誌稿』をお借りした。さらに長楽寺住職の高橋智運氏には碑文の解説にご協力いただいた。全ての方々に厚く御礼を申しあげる。

対象地震：1923 年関東地震

#### 文献

- 土井浩, 1994, 石碑を訪ねて(平塚の歴史を読む) 1, 平塚広報(現在の「広報ひらつか」)(4 月 15 日)
- 土井浩, 1996, 石碑を訪ねて(平塚の歴史を読む) 23, 平塚広報(2 月 15 日)
- 平塚市博物館, 1993, 平塚市史第 12 巻別編民俗, 871pp.
- 平塚市博物館, 1997, 平塚市史第 7 巻資料編近代(3), 864pp.
- 平塚市役所, 1972, 平塚市制 40 周年記念誌, 241pp.
- 井出栄二, 1985, 平塚の地誌, 精興社, 394pp.
- 今泉義廣, 2002, 平塚郷土略史, 平塚市史資料叢書 3, 平塚市博物館市史編纂担当編集, 156pp.
- 井上公夫, 2008, 第 I 部, 第 3 章 震災地応急測図原図と土砂災害, 第 II 部, 震災地応急測図原図と土砂災害, 『地図にみる関東大震災』図録(歴史地震研究会編), 日本地図センター, 18-39, 50-61.

神奈川県立歴史博物館, 2003, 80年目の記憶-関東大震災といま, 特別展図録, 112pp.

諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 4, No.4, 21-45.

内務省社会局編, 1926, 大正震災志, 上巻, 1236pp.

西坂勝人, 1926, 神奈川県下の大震火災と警察, 警有社, 496pp.

斉藤匡念, 2006, 報恩山来迎院阿弥陀寺寺誌稿(寺誌編纂用資料集).

佐藤菊治, 2002, 平塚市の寺院巡り,  
<http://www.geocities.jp/satoukikujip/>

高瀬慎吾, 1970, 新平塚風土記稿, 平塚市教育委員会, 341pp.